千里キリスト教会　主日礼拝説教

日　　時　2017 年 08 月 06 日
聖書個所　Ｉテサロニケ 03：01～13
説教主題　「聖徒の交わりの祝福と喜び」
説 教 者　徳本　篤

序　文）

聖徒の交わりをあらわ「コイノニア」は、日本語の「お友だち」「お付き合い」以上のことばです「コイノニア」とは「共に分かち合う」「一緒に行動する」という意味があります。第一ヨハネ１章に、キリストが人の子として地上に来られた目的は私たちと交わりを持つためであったことが書かれています。

互いに経験したことを分かち合い、同じ目的に向かって一緒に行動するとどうなるのでしょうか。ヨハネは次のように語ります。「私たちの喜びが全きものとなるためです。」（Ｉヨハネ 1:4）この全き喜びこそ、今日の説教の主題である「聖徒の交わりの祝福と喜び」として注目したいことです。

本　論）

Ａ　テサロニケ教会の人々の信仰を杞憂するパウロの心情（３：１-５）

５節の「私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけない」と書かれている、むだになるとは、ゼロになることを意味する「ケノス」ということばが使われています。それは役に立たず捨てられることをあらわします。パウロたちが大変な困難に会いながら働いたことがすべて無駄になってしまうことです。

パウロが心配するように、苦難「スリフィス」という経験は、両刃の剣のように、その受け取り方によって試練「パイラスモス」（信仰が強められ確信が実証される）に成ることも、誘惑「パイラスモス」（失望のすえキリストから引き離される）にも成り得る可能性があるからです。試練と誘惑のどちらにも同じ「パイラスモス」が使われることはギリシア人の深い人間理解によることかもしれません。もちろんパウロはテサロニケの人々を信頼していましたが、それでも苦難を避けようとして信仰から離れるようなにならないか、とても心配だったのです。

３節の動揺する「サイノー」とは、犬が尻尾を振る仕草をあらわすことばです。そこから、周囲の人に自分をよく見せようとする。世間の評判をよくするためにわざと幸せで楽しそうに振舞う。相手の機嫌を損なわないよう気兼ねして、こびへつらう態度をあらわします。ギリシヤ語の人間描写力はすごいですね。まさかテサロニケの人々がそんなことにならないと思うが、それでもパウロには心配になって平安がありませんでした。

ある聖書の箇所には「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。」（Ｉペテロ 5:7）と書かれています。クリスチャンは心配したりしたら不信仰なのでしょうか。子どものことが心配にならない親がいるでしょうか。子どものことを心配しない親は親ではありません。友だちのことを心配しない友だちがいるでしょうか。友だちのことを心配しない友だちは本当の友だちではありません。テサロニケの人々のことを心配しているパウロの友情は本物です。私たちが持っているものは本物でしょうか。

Ｂ　パウロの心配を喜びと感謝に変えたテモテからの良き知らせ（３：６-９）

テサロニケの人々の動揺を杞憂するあまり、平安を失いそうなパウロでした。そこにテモテが派遣先のテサロニケから良い知らせを運んできました。パウロは喜びがあふれ出て、神への感謝に変わりました。

６ 節の良い知らせ「ユアンゲリオン」とは、福音をあらわす「ユアンゲリオー」と同じことばが使われています。どちらも喜びの知らせをあらわします。テモテの良き知らせはパウロにこのうえない喜びをもたらしました。私た

ちに伝える福音も、罪のさばきを宣言して悔い改めを強要したり、奇跡や慰めのことばを陳列して神のことばを安売りするようなものとは違うものです。

福音とは、われわれが神に会いたいと願っているように、神もわれわれと会いたいと思っておられるということです。神がそのために必要な道をすべて完成され、われわれを御許に招いてくださっているという知らせです。神からの特別な招待状がキリストを通して届けられたのです。

適用と応答）

今日の聖書個所から、聖徒の交わりには良い知らせがとても大事であり、必要であることを学びました。テモテの働きはテサロニケの人々にとっても、パウロにとってもすばらしい役割を果たしました。

互いのことをいつも気遣い、互いの信仰を励まし合う聖徒の交わりこそ、教会の魅力であり、宣教の力であることを思わされます。もし会うことができないなら電話や手紙で互いに連絡を取り合う。これは当たり前のことだと誰にも分かることですが、実行するのは意外と難しいことです。

私たちはパウロから聖徒の交わりが力を失い、その結果、宣教の働きを無駄にさせてはならないことを学びました。きょう少しだけ勇気を出してお互いのことを心配してみようと思いませんか。キリストに喜ばれることに目を向けてみようと思いませんか。